
お宝と船内の日誌

リック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お宝と船内の日誌

【コード】

N00210

【作者名】

リック

【あらすじ】

ダメダメな船長「お頭」を観察した乗組員4人による日誌……と言っ、

日誌風の物語。完結済みです。

『7月17日 2ページ目』

7月17日 日誌当番「掃除係・ロブ」

~~~~~

俺の名前はロブ。この「ギンギン海賊団」の掃除係だ。早速、お頭がどれだけナマケモノかって言うことをここに書いておくぜい！掃除はほとんど……いや全てと言っていい俺任せだ。お頭は船長のくせして、自分の部屋もロクに片付けねえ。盗んだ宝も、地凶も、まるでゴミみてえにその辺に捨ててんだよ。

しかも、帆の向きや、他の船に対しての攻撃や警戒なんかも、全部船員任せで、自分では何もしようとしねえ。

この前、他の海賊船が攻めてきた時も、剣を抜いて必死に戦ってる俺達の前にフラフラと出てきて、あくびをしながら言ったんだ。

「なんだそいつら？ ロブ、君のダチか」

仮にも、1つの船をまとめる海賊の頭が、乗り込んできた敵の船員を見て、仲間のダチかなんて聞くか？ 普通。

海賊のくせして、口調は女みてえに生やさしいし、細えし、力はないは、緊張感はないは……なんであんなのが、どついう経緯で海賊に、それも頭になったんだか。

でもよお、悔しいことに、そんなバカなお頭も剣の腕だけは立つんだ。それも、船員の誰よりも上手く、並みの腕じゃねえ。

他の海賊の襲撃があった時も、「君のダチか？」なんてふざけたこと言いながらも、余裕で敵を倒してたしなあ。

チツ……。お頭の悪口を書き連ねるつもりが、褒め言葉になってきてやがる。俺はここで断言してやる。この日記が終わると同時に俺はこの船を出る。

あんなバカなお頭の下でなんか、いつまでも働いてられるかよ！俺はいつか自分の船を持って「ロブ海賊団」の「船長・ロブ」になる。

おめえらも、早く逃げた方がいいぜえ。あんな船長のいいなりになつてたら命と忍耐力と精神がもたねえ！！

次に書くヤツはイヴァンだな。思いつ切り悪口書けよ、笑えるくれえにな！

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

『7月18日 3ページ目』

7月18日 日誌当番「こぶん2・イヴァン」

~~~~~

オレの名はイヴァン。財宝という名の光り物が好きな乗組員だ。

……つうか、ロブ、お前悪口書きすぎだ！ いくらバカで、間抜けで、冴えなくて、力が無くて、女みてえな顔したお頭でも、あれは言い過ぎだろよ。

でもよ、お頭のことだけど、あの細え体のどこに、剣を振るう体力があんだよ！

他のことはダメダメでなんにもできないお頭がさ……。いっつも不思議に思ってたんだよね、オレ。

ここだけの話だけど、オレとお頭比べたら、オレの方が強いし、外見いいし、イカしてるだろ？ なあ、イルマさんよ。

なあイルマ、オレと付き合わねえ？ オレお前のこと前から気になってたんだよなあ。船内唯一の女だし。

いって、いって、分かってる。落ち込むから言うなよ。どうせ答えはノーなんだろ？ でも、お前は料理もうめえし、美人だし、お前みてえないいい女、ここでのがしたら、もう二度とお目にかかれなと思うんだよね。

……やべえ、話がずれた。お頭の悪口日記がいつの間にかイルマへの告白になってやんの。

ロブにぶっ飛ばされる前に、話を戻すか……。

んで、お頭のことだけど、オレはきつと人間じゃないと思うんだよ。ミカクニンセイブツってやつだ。普段は人間のフリをしてるけど、いつか本性を現して、オレ達乗組員を食う気だ。あれは絶対そ  
うだ。

お頭の女顔も、きつとオレ達を騙すためにああ言う構造になつてんだよ。剣しか取り柄がないのも、身の回りが汚ねえのも、乗組員に興味すら示さないのも、みんなみんな、人間じゃないからなんだ  
ぜ。

なんなら、オレが命をかけて、次の日記の番までに真相を突き止めてやるうか？

「人間じゃなかった」に、6000チップ賭ける！

んじゃ、今回はこれで終わるぜ。読んだヤツ、ちゃんとお頭に見つかんないところに隠しとけよ。

PS・イルマ、あれ冗談じゃないからな！ ちゃんと……答えろよ？ オレはどんな高価な財宝よりも、お前の答えが欲しいんだよ。次はイルマ、お前の番だけだよ、さすがに、その……答えはここに書くなよ。恥ずかしいからよ……。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

『7月19日 4ページ目』

7月19日 日誌担当「乗組員・イルマ」

~~~~~

ハロー。私は女乗組員イルマよ。自己紹介なんて、今さらだけど、以後お見知りおきを。

うふん、私これでも強いのよ？ 読んでいらっしやる船内の方々、今度かるゝい手合わせ、どうかしらあ。

それはさておき、悪いわねえ、イヴァン。私、あなた達が悪口言ってる、他でもないお頭が好きなのよお。と言うことで、あなたと付き合うことはできないの。

確かに、私だつてこうやつてお頭の悪口日記に参加してるけど、それは私の嫉妬よ、し・っ・と！ でもその嫉妬は、あくまで乗組員としての物であつて、女としてのじゃないわ。

船内の人達全員が私と同じように嫉妬してるはずよ。「剣」に。だつてお頭、剣術以外に興味ないんだもの。

「私」より「乗組員」が大事で、「乗組員」よりも「お宝」が大事で、それよりも、「船」が大事。そしてそれよりも、もっともつと「剣」が大事なのよ。

そういえば、私、見ちゃったのよ。お頭が、乗組員の1人と一緒に恋占いしてるトコ。子供みたいに喜んでたわ。「これでプロポー

ズ出来る」ってね……。

でも、私じゃないことは確かね。以前お頭つたら私に向かって「結婚するなら君みたいの人より、剣術の上手い人がいい」って。全く、失礼しちゃうわよね。私、こんなにキレイで魅力的なのに。

べつに、いいんだけどね。私は船内結婚なんて望んでないから。だって、昔誰かが言ってたもの、「海賊が結婚なんてするもんじゃねえよ」って。

まあ、言わなくとも、誰かっていうことは分かるでしょ？

私が、「大海賊との恋愛に憧れてる」って言ったら、あの人つてば、そうやって私を引き止めたのよ。私がどこかの海賊と結婚しちゃうとでも思ったのかしらね。

……あら、私つたらイヴァンと同じことしてる。話がずれたわ。

お頭の話に戻すわね。

とにかく、お頭の不審行動は今に始まった事じゃないわ。この前なんか、私に「女性が言われて嬉しい言葉パート10」を聞いてきたのよ。それだけじゃないわ、盗んだ宝石を器用にネックレスやペンダントにしているの。まだまだあるわ。

真夜中に、ランタン片手に古い地図を読んでいるのよ。それは、もう5回ほど目撃したわ。

……ロブもイヴァンも、お頭が女みたいだって言ってたけど、彼は「顔が女みたい」なだけで、ちゃんと性別は男でした。

私はそのテの噂に興味を持たないとお思い？ みんな言ってるわ、「お頭は実は、男装した女なんじゃないか」ってね。

でも安心して、ホントにホントに男だから。私が性別も分からない人を好きになるわけないでしょ。

長くなったけど、もう私は書き疲れて腕が痛いわ。料理が出来な

くなっちゃうといけないから、ここら辺で終わるわね。

……次は誰だったかしら？ まあいいわ、じゃあねえ。

PS・イヴァンへ。

お頭にフラれたら付き合ってあげてもいいわよ。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

『7月20日 5ページ目』

7月20日 日誌当番「こぶん1・アンディー」

~~~~~

ハイ！ おいら、アンディーだじえい。お頭に隠れてコソコソ日誌を付けるのも楽じゃないんだじえい。今も、いつお頭に呼びつけられるんじゃないかってヒヤヒヤしながら、貨物室の床に寝ころんでこれを書いてるんだじえい。

今までの、読ませてもらったけど、みんなだんだん話がズレてるんだじえい。

と、とにかく、今まで、「お頭は女、説」や、「お頭は恋をしてる、説」、「実は人間じゃない、説」……色々出てるけど、やっぱり、一番イヴァンが正しいと思うんだじえい！ ミカクニンセイブツ……良い響きだじえい。

だって、あの「お頭」が結婚やプロポーズだなんて……。きつと一生無縁だと思っただじえい。

あの女の人みたいな顔で、「君が好きだよ」なんて言われたら、きつと気持ち悪いじえい。それにお頭に、甘い言葉は似合わないんだじえい。

バシバシ剣を振って、どさどさゴミを散らかして、バサバサ地図を落として、船が斜めに傾いても水没しそうになっても、自分じゃ

舵を絶対に握らないのがお頭なんだじえい。女の人に優しい言葉を掛けてるお頭なんて、お頭じゃないんだじえい。

おいらは「イヴァンが正解」に、10000コイン賭けるんだじえい。

そつだ、お頭の不審行動について、おいらからも情報があるじえい。2日前の晩、いつもは扉が開いてるお頭の部屋が、その日はきちんと鍵が掛けられていて、何度叩いても応答がなかったんだじえい。まだ7時35分だったんだじえい？

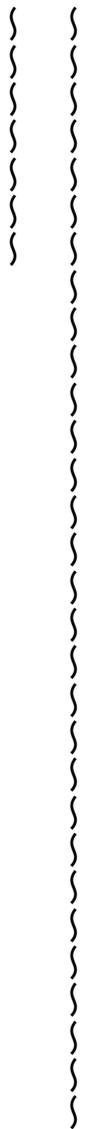
そしてそして、耳を澄ませてみると……いつもの、お頭がペンダントやネックレスを作る時の金属音が聞こえたんだじえい。

次の日、お頭は機嫌が悪そうにマストを睨み付けてたんだじえい。イヴァンが書いた地図もクシャクシャのビリビリのボロボロで、ゴミ箱にポイ、だったんだじえい。

でも、おいらは優しいから、イヴァンが悲しむと思って、そつとお頭のゴミ箱から地図を取り出して、修復しておいたんだじえい！

そろそろ、お頭が呼んでるんだじえい。この日誌は貨物室の5番目の棚に押し込んでおくから、明日、ロブが書くんだじえい。

PS・イヴァンの地図の半分は修復出来たけど、残りの半分は無理だったんだじえい……。



『7月21日 6ページ目』

7月21日 日誌担当「掃除係・ロブ」

~~~~~

おい、イヴァン！ 何やってんだよ、お頭の悪口書いてやれって
言っただろ。何が「ミカクニンセイブツ」だ。そんな物、この世の
中にいるわけねえだろ！

それに、誰だ、この日誌をお頭の部屋の前においたヤツあ。もう
少いで、俺達の書き連ねたブツを読まれるところだんだんだぜ！！
あんなナマケモノのお頭も、剣の腕だけは立つんだ、もし仮に見
られでもしたら、俺達全員サメのエサか、剣舞の練習台になっちま
う。

だいたい、女だの男だの、ミカクニンセイブツだの、恋をしてる
だの……この日誌は「妙ちくりんなウワサ日記」か？ もっとまと
もに、お頭への苦情や嫌味を書けよ。俺には書き切れねえほどある
ぜ。

どうせ今回の分書いたら、俺はここを出て行くんだ……今まで溜
めてきたあのナマケモノ船長への嫌味をたっぷり書き込んでやる。

まず最初に気に入らねええのが、お頭の「女顔」と、「女みてえ
な口調」と、あの弱々しい細えところだ。俺が船長だったら、あん

なヤツぜってえに船員なんかにはしねえ。

それに、身の回りは汚いは、地図は書けないは、お宝は途中で捨てるは、舵は握らないは、方角は決めないは……あんなのは、海賊じゃねえよ!!

よく今まで『ギンギン海賊団』のリーダーとして誰にも文句を言われずにやってきたと、表彰してやりたいぜ。

おいお頭、覚えてろよ、今までさんざんコキ使いやがって。俺が船を持って船長になったら一番にこの船を襲撃してやる!!

……長くなつたな。俺はどこかの船の船長になる、あばよ。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

『7月22日 7ページ目』

7月22日 日誌担当「こぶん2・イヴァン」

~~~~~

よう。オレだ、イヴァンだ。お頭の事、バッチリ調べてきたぜ。
これ見たらきつとみんなぶっ飛ぶだろうな。

と、その前に、ロブ。3日前、お頭の部屋の前にこの日誌置いた
のオレだよ、オレ。わざとオレの書いたページに折り目付けて置いといたんだよ。次の日に機嫌悪かったのも、たぶん日誌見たからだろうな。

で、本題だけど、お頭はミカクニンセイブツじゃあ無かったんだよな、悔しい事によ。

でも、海賊になった経緯は調べてきたぜ。それがすごくぶっ飛んでやんの。

いいか、言うぞ、ビツクリするなよ？ なんと、お頭は、お頭は……「ただのナマケモノ」だ。

ははは、笑えるだろう？ あのバカ船長に秘密や隠し事なんかあるわけねえだろ？ あんな女みてえなのが海賊になったのだって、ただ、先祖が代々海賊の船長っていうしがらみだけだ。気にするよ
うな事は何もねえよ。

まあ、お頭に不満のあるヤツは「船長のリコール」を申し出るん

だな。でも、リコール戦をお頭に申し込んだ所で、あの人に剣で勝ち目はねえけどな……。

……悔しいけどよ、お前らに6000コインやるよ。賭はオレの負け。

長いのか短いのか分かんねえが、この辺で終わるぜ。じゃあな。

PS・イルマ、あれ嘘じゃねえよな？ 約束だぞ！

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

以下・破れたページの修復版。イヴァンが最初書こうとしていた物の切れ端と思われる。彼は上記の物を書いた後、ページを半分を破り捨てている。

これは彼のゴミ箱から見つかった物を、イルマが隠れて修復した物である。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

なんと、お頭は、お頭は……お頭は自分の過去にまつわる重大な秘密を持っていたんだ。

みんな知ってるだろう？ 16年前の事件……。お頭は、あの事

件に大きく関わってたんだよ。

当時のウワサによると、どこかの残虐な船長が、航海中に見つけた船の船員を手当たり次第殺していくって言う、恐ろしい事件だ。

それで、その被害にあった船の「とある乗組員」の息子が、お頭だったってわけ。

お頭の父親は息子を海に落として、残虐な船長から守った。でも、乗組員も船長もそいつに殺されたんだ。

そして、お頭は必死に海を泳いでいって、どうにか生き延びた。

その後、「ギンギン海賊団」の船長となって、当時父親や船員を殺した船長に復讐しようとして燃えてるって事。

お頭の剣の腕も、父親と船員の敵討ちのためだったんだ。

……なのに、俺達は何も知らずにお頭の悪口ばかり……。3日前、お頭からこの話を聞かされて、オレは今までの罪悪感で胸が痛かったぜ。

日誌に書きたかったけどよ、お頭に口止めされてるから無理なんだよ。でも書きしまったから、このページは破んねえとな。

お頭、今まで悪かったよ。「女顔」だの、「ナマケモノ」だの言うて……。オレ、明日からもっと真面目に働くよ。

お頭が「ダメ人間」なのは、演技だったんだな。

でもひでえよ、オレの書いた地図、破っちゃうなんてよ……。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

『7月23日 8ページ目』

7月23日 日誌担当「乗組員・イルマ」

~~~~~

……悪いわねえ、イヴァン。あなたに内緒で破れた記事は修復させて頂きました。本当、ビックリだったわ。お頭にあんな過去があったなんて。

うふっ、ますます惚れちゃうわ。あなたにじゃなく、お頭によ？

ねえ、お頭のナマケモノが演技なら、私に興味がないのも「演技」って事も考えられないかしら。だって、お頭も少し女々しいけど、やっぱり男性だもの。女性に興味を示さないはずがないわ。

とにかく今のところフラれるつもりはないから、やっぱり私イヴァンとは付き合えないわ。ごめんなさいね〜。

話は変わるけど、明日でこの日誌も終わりよねえ。そこで、私から提案があるの。

イヴァンの重要記事を読んだのは私だけだけど、最後のページにはお頭への感謝のメッセージと今後の目標を書かない？

みんなが書かないなら、私独断で書きちゃうよ？ だって、これはお頭に告白する絶好のチャンスだもの！

「私、ずっとあなたの事が……」って、私が書たのを見たら、お頭

はどんな態度を取るかしら。うふふ、楽しみだわ。

ところで、みんなお頭の本名知ってるかしら？ いつも愛称の「お頭」で呼んでたから、知ってる人は少ないかも知れないけど……。まあ、当然私は知ってるわよ。

お頭、いつかどこかの大海賊と、私を賭けて戦ってくれないかしらあ……。

……冗談よ、冗談。イヴァン、今あなた絶対動揺したでしょ。

じゃあ、日誌が明日で終わる事に乾杯しつつ……今日はこれで。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

『7月24日 最後のページ』

7月24日 日誌担当「アンディー、ロブ、イヴァン、イルマ」

~~~~~

アンディー

この日誌も、今日で最後だと思うと、何だか悲しいんだじえい。イルマの提案通り、よく分からないけど、ここにお頭へのメッセージを書いておくんだじえい。

お頭へ。ナマケモノでいたのは事情があったからだって、イヴァンの書いた記事の残りを読んだイルマが言ってたんだじえい。それって、今までの全部演技で、舵を握らないのもわざとって事なんだじえい？ 記事を読んでないおいらには分かんないんだじえい。

でも、お頭の事今まで悪く言ったり、「女顔」だってふざけてたのは謝るんだじえい。

これからはちゃんと、お頭の言う事を聞いて真面目に、地道に働くんだじえい！

お頭には借りや恩がたくさんあるじえい。海でおぼれていたおいらを拾ってくれて、「ギンギン海賊団」に入れてくれたんだじえい。それに、おいらのマヌケな話を真面目に聞いてくれたのは、いつもお頭だったんだじえい。

それなのに、悪口言ったりしてごめんなさい、そしてありがとうございます。
なんだじえい。

この恩は一生掛けて、いつか返すんだじえい！！

ロブ

おい、お頭！ どうやってイヴァンを丸め込んだか知らねえが、喜ぶんだな、こんなに妙ちくりんな考え方をする乗組員がいる事を。だが、俺は違つぞ。俺は誰が何と言おうと、自分の船を持つ！そして、すぐにここを襲撃に戻ってくるぜ！

最近、「お頭は演技してる」って言うウワサをよく耳にするが、んなわけねえだろ！ 演技であんな身の回りを汚くしたり、宝や地図を捨てたり、船を水没させようとするヤツはいねえ！！

とにかく、俺は行く。お前みたいなナマケモノ船長に付き合つたら気がおかしくなつちまう。

もし、引き止める気があるなら、せいぜい頑張つて俺を説得するんだな！

あばよ、ナマケモノの女顔船長さんよ！

イヴァン

……わりい、お頭。書いてから捨てた記事をイルマが修復したらしくつて、イルマにはお頭の秘密がバレちまった。

にしても、オレも驚いた、お頭にあんな過去があつたなんて……。

オレだったらもうとつくに諦めて、人生も何もかも捨ててたかもな。あの状況で生き延びて、んでもって剣の腕を極めるなんて、並大抵の人間の出来る事じゃねえよ。ホント、すげえ。

……なあ、お頭？ 話は変わるけど、イルマはお頭が好きなんだよ、オレじゃなくって。悔しいけど、とつても悔しいけど、オレの代わりにイルマを幸せにしてやってくれ。……頼む。

でも、ここで宣言しておく。オレはたとえお頭がイルマを好きだつて言っても、オレはその数倍……いや、何億倍もあいつの事を想つてるつて事だ……。たとえ剣でお頭に負けても、イルマを想う気持ちは、お頭にも、誰にも負けない……！

……また話がズレてやんの。

とりあえず、これからは今よりも、もっと真面目に働くからよ。オレの活躍、期待して待つてろよ、お頭。

イルマ

……やだわイヴァンったら、妬いてるの？ 「あなたとは付き合いえない」とは言ったけど、「イヴァンの事が好きじゃない」とは、ひとことも言っていないわよ。

ねえ、読んでるんでしょ？ お頭。私ね、あなたが好きなのよ。ものすごく唐突だけど、あなたが好きなの、惚れてるの。

分かってるわ、お頭は女性に惹かれるようなタイプじゃないつて事。でも、私、あなたの事をずっと見てきたの。もしかしたら、あなたしか見えてなかったのかも知れないわ。

剣を握っている時のあなたは、普段からは想像もつかないほど真剣な顔をしていて、「やつぱり「お頭」は男の人で、ここの船長なんだな」って、実感するの。

少し前に、この船が襲撃された時、雨の中戦っているお頭を見て、それはもうメロメロだったわ。

あの時、私もお頭の近くで戦ってたのよ？ 覚えてる？

……私の思いへの答えはいつでもいいわ。でも、イヴァンのようにみんなの見る所に書くのは止めてね。

これからは、お頭がみんなが敬うような船長になれるように、全力でサポートするわ！！ 頑張ってる。

END・DIARY

『船長の手記』

船長の手記

~~~~~

あの日、いきなり乗り込んできた船長率いる海賊に、乗組員、そして父さんは、なすすべなく、ヤツらの剣の前に倒れた。

あの時、僕 いや、私を海に投げしてくれなかったら、自分は今、ここにはいなかっただろう。

血の海に変わった船の上で叫び声を上げていると、父は「逃げて生き延びろ」と囁き、当時子供だった私を海に落とす。そのすぐ後に、あの気の狂った船長が父にとどめをさすのを見た。

寒くて冷たい海の中を、死ぬものかと一生懸命に泳いだ。だんだんと空は暗くなり、海は荒れ始めた。

自分が今どこにいるのかも分からない海の中で、「諦めるな」と言う父の口癖を何度も呟いた。

そして、おそらく次の朝日が昇った頃に、どこだか分からないが岸に流れ着いた。偶然にもそこには人が住んでいて、小さな村があった。

私は「ギンギン海賊団」の船長になるまで、その村にいた女性に育てられた。彼女は私を実の子供のように可愛がってくれ、私も、彼女を母親のように慕った。

しかし、私は父の事も、船員の事も忘れはしなかった。気が付けば毎日のように剣を振り、父達を殺したヤツらへの復讐だけを思っ  
て生きてきた。

剣術は独学だったが、自分でも驚くほど腕は上がっていった。最終的には村で一番の剣士とつたわれていた若き村長までもを打ち負  
かした。

そして、自分の船を持ち、「GIN - GIN<sup>ギンギン</sup>海賊団」なる物を作  
った。全ては、この海のどこかにいるあの船長に復讐するためだ。

海賊団といっても、敵に近づきやすくするための策でしかなかったため、正直なところ、船員は私1人でよかった。しかし、身寄りのない人や、海賊に憧れる人達を善意で船員として迎えた結果、大規模な「海賊団」になっていった。

海でおぼれ、身よりの無かったアンディーは、なぜか自分に似たものを感じて船員として迎え、地上の賊　つまりは盗賊だったイヴァンも、身寄りがないと継られ、船員にした。

そして、海賊になる事を夢見ているというロブや、料理をしながら各地を転々としていたイルマを船内料理人と船内の掃除係に迎えた。

あの4人を含む256人の船員達にはいつも感謝している。

つい何日前、イヴァンが私に古い日誌を見せた。書いては破り、破っては書いてを繰り返したあげく、残り9ページほどになった物だ。

イヴァンは端の折ったページを開いて、私に渡した。……中は、私が「ミカクニンセイブツ」ではないかという事と、イルマの事が書き連ねられていた。

彼の目を盗んで、他のページをパラパラとめくってみると、私に対する嫌味やグチが書き込まれていた。「女顔」、「女みてえ」、

「ナマケモノ」……その類の言葉がほとんどだった。

ナマケモノで、身の回りが汚いというのともかく、「女顔」という言葉には、不快な物を感じた。昔から「女々しい」だの、「女」だの言われてきたせいか、私はそれらの言葉が一番嫌いだからだ。

私を、船員達は誤解しているようなので、イヴァンにだけ、今まで隠し通してきた秘密を全て明かした。話が終わると、彼はサメが目の前を通り過ぎたような顔で私を見ていた。

ここに、改めて書いておく。

私が「ナマケモノ船長」を演じているのは、全て船員達のためだ。私が復讐しようとしているあの残忍な船長は、きつと今もどこかで生きている。

ヤツらに目を付けられず、安全で居続けるには、地味で、誰も興味を示さないような海賊団にいるしかない。

何もしない、バカなナマケモノ船長を演じていれば、物資や宝の数も少ないと見て、攻撃されにくい。せっかく集めた宝を捨てるのも、そのためだ。

私が今ここに存在し、生き続ける理由はただ一つ。父や、船員達を殺したヤツらを、この手で倒す事だ。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0021o/>

お宝と船内の日誌

2010年10月9日10時19分発行